

競技集団における効果的指導についての一研究 ——凝集性からみた分析的研究——

杉山喜一・永井 純・市村操一・関岡康雄

A Study of the Effective Coaching of Athletic Groups — An Analytical Study Focusing on Cohesiveness —

Kiichi SUGIYAMA, Jun NAGAI, Souichi ICHIMURA and Yasuo SEKIOKA

This study studied the influence of group structure and some factors on cohesiveness of the athletic group (especially road relay teams), and attempted to give the effective method of coaching to the teams and the marginal man.

Cohesiveness is evaluated by the scale of identification, loyalty and attractiveness to group and evaluation of importance of group activity, and which is measured by questionnaire in analyzing the relationships between the members' attitudes and behavior and the function of the athletic group. This questionnaire (a group membership test by Sugiyama and others) consisted of the 26 items.

The 5 university teams of road relay (110 subjects) were investigated in Sept. 1982.

As a result of the one way analysis of variance, cohesiveness differed significantly among five teams owing to the distinction of group structure determined by location of authority.

The result of statistical tests (T-test or chi-square test) revealed that cohesiveness was affected by some factors (i.e. role experience in group, motive of entry to the team, life style as a training lodging).

The above results gave us some view points of coaching to the road relay teams and the marginal man who was not enough to cohere in the group.

本研究では、競技集団（大学駅伝チーム）の効果的指導について検討するために、集団機能にかかわる凝集性について問題にしている。

一般に高度の組織化されたスポーツ集団では、人間関係を媒介として各集団独自の習慣やきまり、技術や練習法など、多面にわたって成員の集団内の行動に対する認知的あるいは感情的枠組みを与え、集団目標達成のための努力を要請するのが普通である。しかもこうした目標成就への努力の要請は、集団が成立するための必要条件であり、また運動部集団への加入の要件でもある。当然部員は、この強制の持続あるいは強化による内面化・習慣化が行なわれるところに、部員に共通する内的傾向が生成される要因を考察することができる。このような強制あるいは強化による内面化・習慣

化を伴う集団の要請は、いわば成員に特定の対象に対する認知的・感情的枠組として態度形成の重要な条件となっている。

このような部への部員の態度や行動は、集団やその活動に対する成員の関係づけ、あるいは集団のまとまりに関する態度の問題という、いわゆる凝集性の問題として考えてみることができる。つまり凝集性の高い集団では、成員の集団生活に対する魅力の程度や同一視の程度が高く、実際の自我関与も高いことも理解できる訳である。

Howardによると、成員間にみられる相互の魅力とチームの成功との関連性については、そのチームの指導状況によるところが大きいとしている。また実際凝集性を高め、多くの課題を遂行させ、競技に対してあまり意識させずに、成員間（特に

ライバル同志)の調和を促進してゆけるコーチは、チームのよりよいパフォーマンスを導くことも指摘されている。

これらのことから、チームの生産性とのかわりから、凝集性に影響をおよぼすと思われる要因の一つとして、指導にかかわる集団の構造について問題にしていく必要がある。

さらにわれわれの行動は、同一の刺激に対して必ずしも同一の反応をするものではなく、たとえ同一刺激であっても、その反応はその時その時の心構えや態度・感情などの主体的条件によって違う。ただしこの心構えや態度は、その人の環境や所属する集団によって形成されるものである。そして心構えや態度に対する集団の影響は、人間対人間の関係によってもたらされると考えられる。

このことから、競技集団の効果的指導を検討する場合、凝集性に影響を及ぼすと思われる成員の主体的条件、さらには環境や所属集団の影響についても考慮してみる必要がある。

以上のことから、本研究では、競技集団の機能にかかわる凝集性について以下のことを明らかにすることによって、その効果的指導についての一知見を得ることを目的とする。

1. 凝集性について、指導に関わる集団の構造との関連性を明らかにする。
2. 凝集性に影響を及ぼすと思われるいくつかの要因について明らかにする。

(1) 凝集性と集団構造との関連性について

ある集団における望ましい態度の形成は、集団が成立し活動していく際の、集団の目標や成員の特性あるいは指導のあり方に応じた集団の構造に深く関わっており、それにもとづいた機能を発揮するようになる。

特に、竹村らは、集団の目標やきまりごとができていく過程での決定者の所在によって、いわば権限構造を類型化している。しかも権限構造の違いによって、チームの雰囲気や成員の態度も異なることを指摘している。

したがって、凝集性が集団機能に関わる成員の態度や意識を手がかりとして考えた場合、権限構造の違いさらにはその構造に応じた指導的活動状況の違いによって、凝集性も異なると思われる。

そこで本研究では、権限構造やそれに応じた指

導的活動状況が、凝集性にどのように影響を及ぼすかを検討した。

方法

1) 調査対象

表1に示す通り、駅伝の名門校として、5大学(国立3大学、私立2大学:計110名)が対象として選ばれた。

表 1 調査対象: 5大学陸上競技部の駅伝チーム

大学名	調査人数	所属学連	戦績	公・私別
D大学	26	関東	A	私立
T大学	28	関東	A	国立
A大学	26	関東	A'	私立
S大学	12	中部	B	国立
H大学	18	中国	B	国立

A : 箱根・全日本学生駅伝上位入賞レベル
および関東インカレ1部リーグ

A' : 箱根駅伝出場レベル
および関東インカレ2部リーグ

B : 全日本学生駅伝出場レベル
および地区インカレ上位入賞レベル

2) 手続き

各チームの権限構造の類型化にあたって、竹村らが用いた運動部の目標および規範生成過程からの分析項目によって各チームのリーダーより回答を求めた。そしてその分析基準にしたがって、権限構造が決定された。またチームにおける指導的活動状況についても直接リーダーから回答を求めた。

凝集性の測定方法として、丹羽による成員性検査を手掛りとして杉山らが作成した凝集性尺度(表2)を用いて、昭和59年9月に調査を行なった。なお、検査の実施方法については、そのリーダーによって説明された。

集められた110名のデータサンプルは、得点化されたのち、棄却検定によって、各集団を代表する測定値として適切かどうかを検討された。さらに適切であると認められたサンプルをもとに χ^2 乗検定を行ない、各集団におけるサンプルの適合度について検討を加えた。適合度が認められたところで、平均値を算出し、一要因分散分析によって、平均の差の検定を行なった。

表 2 成員性検査における各項目とその基準

NO.	項 目	基準
1	時間面から	C
2	学生生活面から	C
3	経済面から	C
4	試合や練習について	A
5	部のムード、人間関係について	A
6	部の重要性の意識について	B
7	自分の招来への寄与として	B
8	部所属についての誇りとして	D
9	部との一体感として	A
10	部活動や価値意識について	B
11	部活動の是認について	B
12	部の目標や方向への支持	A
13	練習について	A
14	入部希望について	A
15	残留希望について	A
16	部の状態の判断について	B
17	練習欠席時の態度から	C
18	成員間の連帯意識について	E
19	成員間の信頼意識について	E
20	成員間における一体感について	E
21	部への協力的態度について	C
22	成員への働きかけについて	E
23	部への帰属感について	D
24	成員における対人感情について	E
25	成員からの承認感情について	B
26	成員間における競争意識から	F
基 準	A : 集団の魅力 B : 集団の価値づけ C : 集団への忠誠 D : 集団への同一化 E : 成員間の同志的感情 F : 成員間の競争的感情	

表 3 目標および規範生成過程からみた集団構造の分析

大学名	規 範			目 標		
	練習 計画	キャプ テン	選手 決定	内 容	設定 方法	集団の 特徴
D大学	部員外 者	部員外 者 (指名)	部員外 者	統一的 個別的	部員外 者	部員外 型
T大学	部員内 首脳者	部 員 (推薦)	部 首脳者	統一的 個別的	部 首脳者	部員内 首脳型
A大学	部 首脳者	部 首脳者 (推薦)	部 首脳者	統一的 個別的	部 首脳者	部 首脳型
S大学	部 員	部 員 (推薦)	部 員	個別的	部 員	部員型
H大学	部員内 首脳者	部 員 (推薦)	部 員	統一的 個別的	部員内 首脳者	部員内 首脳型

結 果

各大学駅伝チームの権限構造については、各チームのリーダーから得られた回答より、権限構造の分析基準にしたがって検討した結果、表3のように類型化された。

さらに各チームごとに指導的活動状況を伺った結果、次のようにまとめられた。

(D大学における指導的活動状況)

このチームは部員外型で、コーチの権限が強く、そのためコーチを中心とした組織的活動が行なわれている。コーチについてはかつて日本の一線級のランナーとして活躍した選手で、競技に対しても厳しい態度で臨むというコーチは、練習における指導態度も厳格であるといわれる。また「他人をなてても自分はスツと身をひく」という態度、「けなしはだめだが、ほめさせたら一晩でもほめたる」といった姿勢に、成員のコーチに対する信頼感は大きい。さらにまた選手と同じ宿所に住み、それこそ寝食を共にするといわれる程、コーチ自身も部員に対して積極的に関係づけを強めている点が極めて特徴的であった。

(T大学における指導的活動状況)

T大学は部員内首脳型で、基本的にはキャプテンやチームの代表を中心にして組織的活動を行なっている。このチームのコーチは、かつて日本を代表とする一流の中距離ランナーで、競技に対する勝負根性は極めて評判が高い。その勝負根性と長年の経験から生まれたいわば「陸上競技に対して自分自身で問題意識をつかみ、主体的に取り組ませる」ような指導方針は特に興味深い。チームに対しては、キャプテンなどを通じ全体の方向性を教示し、個人個人に対しては各自の特性を踏まえながら個別指導を行なっている。したがって、チーム全体の具体的活動計画や内容については部員内首脳がたて、個人練習などはコーチによる「個人面接」形式で各自の主体性を伸ばしていくところに大きな特徴が見られた。このように部員とコーチとのバランスのとれた関係がみられたが、あくまでも部員主体を基本としている背景には、部員が体育系の学生で構成されており、そのほとんどが将来、教員やコーチ志望であるという、いわば教育的配慮によるものであると伺っている。

(A大学の指導的活動状況)

A大学は部首脳型で、コーチやキャプテン、上級性を中心に組織的活動を行なっているチームである。コーチ自身は、同大学出身のOBで、大学時代は部のエースとして駅伝からマラソンまで活躍した選手である。母校に対する期待は大きく、練習態度は厳しいが、その後進の指導において、部員の信頼は大きい。部員はまじめでおとなしいがコーチに対してやや依存的な態度がみられると伺っている。しかもコーチ自身の都合上、月に3~4回程度しか指導できないため、コーチや上級生を中心に部全体はまとまっているが、部の練習計画や内容をいかに部員全体に把握させるかがコーチ自身の悩みの種だと伺っている。

(S大学の指導的活動状況)

S大学は各部員一人一人が自主的に活動に取り組んでいるといった、典型的な部員型である。組織的には、部長、監督、コーチ、キャプテン、マネージャー、学部代表者などの役員がおかれ、組織的役割は徹底しているといわれる。ところがタコ足大学と呼ばれる大学は、県下4支部に分れ、チーム全体の活動は、せいぜい月一回の定期練習、あるいは長期休暇中を利用しての合同合宿程度と伺っている。したがって、各支部での活動も、複数の学部構成という条件も加わって、各自の練習計画にしたがって行なわれている。

このようなことから、部員一人一人は競技に対して目的意識は高いものをもっているが、組織的活動レベルは極めて低いという傾向がみられた。

(H大学の指導的活動状況)

H大学では直接的なコーチは存在せず、キャプテンやマネージャーなどを中心とした部員内首脳型のチームである。部の目標はあくまでも大試合での総合優勝であるが、これら目標達成のために、チーム全体の協力、あるいは集団活動に対する共通理解がリーダー、フォロワーを通じて必要不可欠となっている。特に「練習には必ず参加」「練習前でのミーティングには必ず出席」といった基本方針を部員全体に義務づけ、徹底させているといわれる。しかもこのような和の精神を基盤としたなかで、活動内容自体は、部員の自主性を重視している点は興味深い。部員が様々な学部の出身であるという背景もあるが、とにかく部員の共通

の目的意識を集団におき、そのなかで、競技に対しては、「個人の内発的力により、よりよい方向へ発露させる」指導体制本チームの大きな特徴だといえよう。

以上のことからその権限構造に応じたさまざまな指導的活動状況が見られた。

そこで次に、これら駅伝チームの凝集性について検討してみたい。

まずA大学に1名、H大学に1名、計2名は、棄却検定によって、集団の代表値よりも著しく低い傾向が認められたため除外された。ただしこの2名については、周辺人としてとらえ、後で検討していきたい。残りのデータをもとに適合度の検定を行なった結果、各チームとも適合度が認められた。そこでその平均を求めてみるとD大学は104.65、T大学は97.04、A大学は91.32、S大学は94.88、H大学は104.65であった。また一要因分散分析によって、5大学の平均値の差の検定を行なった結果、1%水準で有意差が認められた。(表4参照)

表 4 一要因分散分析表

	SS	df	MS	F
級間	2124.26	4	531.06	4.6458
級内	11773.81	103	114.31	(1%水準 で有意)
全変動	13898.07	107	129.89	

この結果についてまず、部員内首脳を中心に、チームの和を基本理念にして競技的活動を高めているところに特徴のみられたH大学、部員外者の権限が強く、完全な合宿制度を通じてコーチと部員が一丸となって競技活動を高めているところに特徴のみられたD大学については高い凝集性が認められた。一方、学部が県下に散在し、チームの合同練習も思うように実行できない状況が指摘されたS大学、部首脳を中心としたチーム組織の中で、コーチによるリーダーシップが発揮できない状況が指摘されたA大学については、低い凝集性が認められた。

以上のことから凝集性の違いが、権限構造から派生してみられる指導的活動状況によって影響を受けることを示すものであった。

(2) 凝集性に影響をおよぼす要因について

凝集性を集団やその活動に対する部員の関係づけ、あるいは集団としてのまとまりと考えた場合、これら凝集性に影響をおよぼすいくつかの要因を

考えてみるができる。

これらの要因は、部員の主体的条件、環境、さらには所属集団にまで及んでおり多面的に検討してみる必要がある。

そこで指導的立場からそのいくつかの要因について従来の研究より引き出してみると、以下の条件にまとめてみるができる。

- 1) 所属学部の違いによる影響について
- 2) 学年の違いによる影響について
- 3) 競技歴の違いによる影響について
- 4) 競技出場経験別による影響について
- 5) 入学の理由の違いによる影響について
- 6) 入部の理由の違いによる影響について
- 7) 競技への関与の仕方の違いによる影響について
- 8) 卒業後の競技への関与の仕方、あるいはスポーツ指導への関与の仕方の違いによる影響について
- 9) 役割経験の有無による影響について
- 10) 出身高校陸上部の特徴の違いによる影響について
 - a. 競技レベル
 - b. 部員数
 - c. 練習活動状況
 - d. 部員の参加状況
 - e. 練習内容
 - f. 目標に関する認識度
 - g. 部のきまりやルール
 - h. きまりやルールの厳守度
 - i. 指導者の部員に対する態度
 - j. 練習のための環境条件
- 11) 高校・大学での生活形態の違いによる影響について
- 12) 陸上部における成員同志上下関係の違いによる影響について
- 13) 部員相互のライバル意識の違いによる影響について
- 14) 指導者の影響度の違いによる影響について

方法

条件(1)～(4)についてはフェイスシートを用い、所属学部・学年・競技歴(中学・高校・大学)・競技出場経験の有無などを記入させた。また条件(5)～(15)については専門家の意見を参考にしながら質問紙を作成し、各意見項目ごとに回答を求めた。

結果の処理として、条件(1)(12)については、態度値の平均、および標準偏差を算出し、同質性(F検定)ならびに平均の差の検定(t検定)をおこない、その有意性について検討した。

条件(2)～(4)(10)については、大学別条件との2条件間で2要因分散分析を行ない、条件間における有意差および交互作用について検討した。

条件(5)～(9)(11)については、カイ2乗検定を行ない、大学別条件との2条件間で連関性について検討した。

結果と考察

条件(1)では所属学部の違う条件として、将来スポーツや体育分野に指導的関わりが強いと思われる体育・教育学部系の部員とその他の学部系の部員との間で態度値の比較を行なった。まず分散比において同質性が認められたため、平均の差の検定を行なった結果、 $t = 2.5430$ ($DF = 106$) で5%水準で有意差が認められた。

条件(2)では各学年別に態度値の平均を求めた結果、1学年は96.52、2学年は94.75、3学年は97.97、4学年は103.14で、4学年が最も高い傾向がみられた。また2要因分散分析の結果、学年別条件間において有意差が認められず、また交互作用も認められなかった。

条件(3)では過去の運動部での活動経験による影響について検討した。その結果、競技歴の長い部員(98.02)のほうが短い部員のグループ(96.39)よりも高い傾向を示した。ただし条件間における有意差ならびに交互作用は認められなかった。

条件(4)では競技経験による影響について検討した。その結果インカレ経験別の比較では条件間に有意差あるいは交互作用は認められなかった。また駅伝競技出場経験別での比較では、条件間に有意差は認められなかったが、交互作用が認められた。特に駅伝競技出場経験者はその態度値において高い傾向が見られた。

条件(5)では大学への入学の動機の違いによる影響について検討した。その結果D大学、A大学などの私立系の大学では、その入学の動機が運動部に関わりが強いのにに対して、T大学・S大学・H大学などの国立系では就職との関わりが強い傾向にあった。

条件(6)では入部の動機の違いによる影響について検討した。その結果どの大学の部員においても

技術や記録向上といった自己実現的な動機を理由としていることが認められ、大学間において違いは見られなかった。

条件(7)では競技に対する取り組み方の違いによる影響について検討した。その結果いずれの大学においても同様の傾向が認められた。

条件(8)では将来の陸上競技への関与の仕方の違いによる影響について検討した。その結果D大学・H大学・T大学の部員の特徴として卒業後も競技を続け、指導者などを志すといった傾向が見られた。しかもこれらの部員については態度値において高い傾向が認められた。

条件(9)では役割経験の有無による影響について検討を行なった。その結果、役割経験のある者のグループのほうが無い者のグループよりも態度値において、5%水準で有無に高い傾向が認められた。

条件(10)では出身高校の競技的・指導的活動状況の違いによる影響について検討した。その結果、D大学部員の出身高校の競技部の特徴として、練習に対する参加率が高く、また目標に対する認識度が高い。しかも指導者の部員に対する態度が厳しく、きまりやルールの厳守度も高い傾向も見られた。T大学では、部員の目標に対する認識度が高く、きまりやルールの厳守度も高いが、実際の決まりやルール、あるいは指導者の部員に対する態度はそれほど厳しい傾向にはなかったと判断された。A大学では、部員の練習の参加状況も良く、目標に対する部員の認識度、あるいは厳守度なども高い傾向にあったと判断された。S大学ではルールなどの厳守度は高い傾向にあったが、実際のルールやきまりはそれほど厳しくなく、指導者の部員に対する態度も厳しくなかったと判断された。また練習活動状況も低い傾向が認められた。H大学では全体的に練習参加状況が悪く、部の決まりもあまり厳しくなかったという傾向が見られた。

以上のことから、D大学・T大学・S大学についてはその部員の高校時代の陸上競技部の影響がみられたが、H大学A大学についてはその影響が認められなかった。

条件(11)では生活形態の1システムとして合宿所生活を取上げその影響について検討した。その結果、合宿所に入っている部員の態度値(96.6)よりも入っていない部員(98.10)のほうが5%水準で有意に高い傾向が認められた。

条件(12)では部のきまりやルールの厳しさの違いによる影響について検討した。その結果D大学・A大学では厳しい傾向が見られたが、T大学・S大学・H大学では厳しい傾向は見られなかった。

条件(13)では上下関係の違いが凝集性にどの程度影響を及ぼすかが検討された。その結果D大学については上下関係が厳しいと感じている部員が多かったが、他の4大学では厳しいと感じている部員は少なかった。

条件(14)では指導者の影響が凝集性にどのように影響を及ぼすかが検討された。その結果、D大学において指導者の影響がかなり大きい傾向が見られたがA大学・S大学・H大学においてこのような傾向は認められなかった。

以上の条件にみられる傾向について、指導上、特に留意しておくべき点についてまとめてみたい。

まず凝集性が所属学部別で、とりわけ体育・教育学部系の学生では比較的凝集性の高い態度値が認められた。これは将来においてもスポーツや運動部との関わり方が強いためと考えられる。このことから将来、競技活動や指導的活動に通じるような指導のありかたが臨まれる。また多くの学部系で構成されているチームについては、できるだけ一部の学部出身者の指導に偏らない、より柔軟な指導体制が望まれよう。

運動部内での役割行動は集団に対する自我関与を高めていくのに効果的であると判断された。このことから、チーム組織としての役割構造などにも十分配慮していく必要がある。

部員の出身校の競技部の活動や指導状況については十分把握しておく必要がある。環境が変われば新しい環境への適応の仕方個人によっては様々である。適応できないものについては個別的に指導する必要がある。

合宿所生活はチームの機能やその機能やその効率を高めていく上で、効果的であると思われる。ただし入宿者への適切な配慮が欠けるとむしろ凝集性を低下させることにもなるので注意する必要がある。

指導者の態度の問題として、毅然とした態度が望ましい。また部員の競技に対する取り組み方が、基本的には技能や記録を高めることであるから、競技に対する理解、さらには個人個人の主体性を高める指導が望まれよう。

各大学チームへの提言

(1)では凝集性が権限構造から派生して見られる指導的活動状況によって影響を受けることが指摘された。さらに(2)では凝集生に影響を及ぼすと思われる要因をいくつか取上げ、それらについて検討を行なった。その結果、各チームごとに問題点が指摘された。

そこでこれらの問題点を考慮して各大学への提言としてまとめてみたい。

(D大学チームへの提言)

部員外型構造で凝集性も高いD大学では、チームの権限や影響力が極めて高く、その合宿所での徹底した競技指導体制は大いに参考とすべきであろう。ただしD大学の問題点として決まりやルールなどが厳しいといった不満が、構造的に隠蔽される傾向が認められた。また部員が指導者に対して依存적であるために主体性が欠如している傾向も見られた。したがって集団においては、縦ばかりではなく横からのコミュニケーションをはかり、また活動は指導者を中心とした個別的内容についても検討してみる必要がある。

(H大学への提言)

部員内首脳型で凝集性の最も高かったH大学では、部員同志の和を基本方針として集団活動が行なわれているところに特徴があった。ただしH大学の場合、部員同志の結合の仕方が温情的で、結果的にきまりやルールが寛容になりやすい傾向がみられた。しかも指導者不在の条件も加わって、競技活動を一層高めていくようなリーダーシップの取りにくい傾向が指摘された。このことから部員内首脳自身が率先し積極的に競技活動に取組みながらフォロワーを指導していく体制が望ましいと思われる。

(T大学への提言)

部員内首脳型で凝集性は中程度であったT大学では、チーム全体の方向づけと個別的指導がコーチ中心にバランスよく行なわれているところに特徴があった。このT大学では技能レベルの高いわばリーダー的立場にいる部員に低い凝集性が認められた。また合宿所生活の在り方にも問題点が認められた。そこで技術レベルの高い者が低い者への牽引となるようなグループ的活動によって、

チーム全体の競技レベルを高める必要がある。また合宿生活については、上級生などを中心にルールなどを明確にし、ミーティング等によってそれら目的意識を高めていく必要がある。

(A大学への提言)

部首脳型のA大学は凝集性が最も低いチームであった。A大学では、部員が指導者や上級生に対して依存적傾向が見られるが、部のきまりや上下関係についての不満が大きく指摘された。しかも技能レベルの低い部員において、特に低い凝集性が認められた。そこで集団の指導方針を部員全体に十分理解できるような機会をリーダー中心に多く作っていく必要がある。またチーム内では役割分担によって組織化し、さらに技能レベルの高い者は活動面でリーダーシップのとれるようなグループ的活動も検討すべきであろう。

(S大学への提言)

部員型で凝集性の低かったS大学では、集団としての活動がほとんど個別に行なわれているところに特徴がみられた。このことから個人の活動をいかに集団の方針にあわせていくかが大きな課題となっている。したがって個人の活動については徹底したノルマを与え、各支部でのサブリーダー等のポジションを置き、そのノルマを達成できるように努力させる必要がある。また部員相互の合同合宿や、対外試合などの機会を出来るだけ利用していくことも必要であろう。

(3) 周辺人についての問題

本研究では、著しく凝集性の低い傾向が認められた二名(A大学に一人、H大学に一人)を周辺人(marginal man)としてとらえた。

このような周辺人は、一般に所属集団の内部でなんらかの不満・不安あるいは劣等感があり、同時にそれを裏返したような誇張・自己顕示などの人格の特徴が知られている。

しかもこのような周辺人による他の部員への影響が、チームの士気を低下させ、その結果集団機能を著しく低下させるために、指導上極めて重要な問題として指摘されている。

そこでこの二人について、フェイスシートや質問紙の回答、さらには実際の日常生活行動記録をもとに、個別に検討してみたい。

A大学：a（経済学部3年20歳）

aの場合、陸上競技経験も深く、チーム内では技能レベルも高い。しかもキャプテン等の役割経験もあり、また高校時代の競技的活動レベルも高かったと思われる。ところがaの入学・入部の動機あるいは競技の取り組み方について調べてみると、自主性に強く欠ける面がみられた。また部内では上下関係に強い不満を持っている。さらに他の部員全員が合宿生活もしくは寮生活であるのに対し、本人だけが自宅通いであった。本人の日常生活をみると、睡眠時間・食事の回数・時間がかなり不安定であり、生活全体のリズムが乱れていることが明らかにされた。

そこでaに対する個別的指導を検討してみたい。まずaは上級生で、技能レベルも高い。集団活動に対する意欲をもたせるために、上級生としての役割を与え、練習面ではグループをリードしてやるような機会を与える必要がある。また、集団への自我関与を高め、生活のリズムを整えるためにも合宿所などの共同生活集団の中に所属させる必要がある。このことはまた、部員間の同志的感情や競争的感情をおこす誘因となり、本人の充実した競技生活が期待できよう。

H大学：h（教育学部2年20歳）

hは中学の時から陸上競技の経験をもっているにもかかわらず、卒業まで継続して競技活動に取り組んだことがない。この大きな理由は、中学時で走り高跳び、高校時で短距離走、現在は中距離走に取組むといったように、自分の種目適性を十分に把握していないためである。指導者にも恵まれなかったこともあり、出身高校の部での活動レベルは極めて低かったと思われる。結果的に本人の競技レベルも低く、競技経験もかなり少ないことが明らかにされた。

そこでhの個別的指導について検討してみると、まず本人に種目適性を十分に把握させることが先決であろう。その上で種目の特性を十分理解させながら、個別的な活動計画や内容を与えていける指導が重要となる。それらを踏まえながら競技経験を増やすことによって、競技に対する意識レベルを高めることが期待できよう。

(4) まとめと今後の課題

本研究では、集団機能に関わる問題として、凝集性をとりあげ、それに影響を及ぼす要因について検討を行なった。その結果、権限構造から派生してみられる指導的活動状況によって影響を受けることが明らかにされた。さらに凝集性に影響を及ぼすさまざまな要因を明らかにすることによって、競技集団や周辺人に対する効果的な指導について検討することができた。

そこで今後の課題として、調査対象を広げ、またより有用な尺度を用いることによって、競技特性に応じた効果的指導について検討してみる必要がある。さらにこれらの研究成果をもとにした指導を、実践面に応用することによって、より一層の効果的指導がはかられることが期待されよう。

参 考 文 献

- 1) Cratty, B.J.: Psychology in Contemporary Sport Prentice-Hall, Inc., (1973)
- 2) Haward, I.N.: Team orientations, interpersonal relations, and team success Res Quart. Vol. 47 No.3 (1793)
- 3) 岩原信九郎「ノンパラメトリック法」日本文化科学社 p.267 (1965)
- 4) 賀川昌明：第4章、チームの力学「スポーツと競技の心理」松田、藤田、長谷川編 大修館書店 pp. 221-22 (1976)
- 5) 海野孝：第2部-7 基礎的な統計法、「運動心理学入門」松田編 大修館書店 (1976)
- 6) 松田岩男「現代スポーツ心理学」日本体育社 (1967)
- 7) 丹羽昶昭、竹村昭：運動部集団とパーソナリティーの関係について(2)体育学研究11, 1 pp1-8 (1965)
- 8) 丹羽昶昭：運動部員の成員性検査作成 体育学研究 13, 1 p.13 (1969)
- 9) 丹羽昶昭：第四章 運動の社会心理学 「運動心理学入門」松田編 大修館書店 (1976)
- 10) 日本体育学会編 「体育学研究法」林書院 (1974)
- 11) 杉山喜一：競技集団(大学駅伝チーム)における成員性についての分析的研究 体育研究科研究集録 Vol.5 pp. 123-126 (1983)
- 12) Zander, A.: Group membership and individual security Hum. Rel. 11 pp 99-111 (1958)

付表

各問いにしたがって、それぞれ正しく記入してください。

1. あなたが大学選んだ理由は何ですか。最も大きな理由1つにまるをつけてください。
 1. 就職に関して有利だから
 2. 自分に好きな学問が出来るから
 3. 運動部で活躍したいから
 4. 周囲のすすめがあったから
 5. わからない
 6. その他 ()
2. あなたが陸上競技部に入部した理由はなんですか。最も大きな理由1つにまるをつけてください。
 1. 陸上競技に対して理解を深めるため
 2. 技術を高め、記録を向上させるため
 3. 趣味として競技を楽しむため
 4. (競技) 仲間をふやすため
 5. 競争して勝ちたいから
 6. 周囲のすすめがあったから
 7. 就職に関係してくるから
 8. 心身を鍛えるため
 9. その他 ()
3. 現在あなたは、陸上競技に対してどのように取組んでいますか。それぞれの項目について (1. 当はまる 2. 当はまらない) のどちらかの番号にまるをつけてください。
 1. 陸上競技に対して理解を深めるため (1. 当はまる 2. 当はまらない)
 2. 技術を高め、記録を向上させるため (1. 当はまる 2. 当はまらない)
 3. 陸上競技を通して、協同や友情を深めるため (1. 当はまる 2. 当はまらない)
 4. 陸上競技において相手に勝つため (1. 当はまる 2. 当はまらない)
 5. 周囲の応援や期待に答えるため (1. 当はまる 2. 当はまらない)
 6. 精神面・態度を身につけるため (1. 当はまる 2. 当はまらない)
 7. 体力や健康の保持・増進のため (1. 当はまる 2. 当はまらない)
 8. 生活における気分転換のつもりで (1. 当はまる 2. 当はまらない)
4. 大学卒業後も、陸上競技を続けていきますか。
 1. 続けていく
 2. やめる
 3. わからない
5. 将来スポーツ関係の指導者になりたいと思っていますか。
 1. なりたいと思っている
 2. 別に思っていない
 3. わからない
6. 今までに、陸上競技部におけるリーダーシップもしくはマネージメントの経験がありますか。
 1. ある
 2. ない

例えばそれは何ですか。該当するものにまるを記入してください。

 1. キャプテン
 2. サブキャプテン
 3. マネージャー
 4. サブマネージャー
 5. ブロック長
 6. ブロックマネージャー
 7. その他 ()
7. あなたの高校時代の陸上競技部について伺います。各質問に対して、それぞれ適当なものにまるを

けてください。

- A. 競技レベルはどの程度でしたか
1. 何人かは全国大会に入賞する
 2. 地区大会に入賞する
 3. 県大会に入賞する
 4. 県地区大会に入賞する
 5. その他 ()
- B. 部員数は全部で何人でしたか
1. 0~10
 2. 11~20
 3. 21~30
 4. 31~40
 5. 41~50
 6. それ以上
- C. 練習は週何日でしたか
1. 7日
 2. 6日
 3. 5日
 4. 4日
 5. 3日
 6. それ以下
- D. 部員の参加状況はどの程度でしたか
1. 90%以上
 2. 20%以上
 3. 60%以上
 4. 40%以上
 5. それ以下
- E. 練習内容はだれがたてましたか
1. 指導者がたてた
 2. 部員がたてた
 3. 指導者と部員が一緒にたてた
 4. 部以外の者 (OB等) がたてた
- F. 部の目標は部員に十分認識されていましたか
1. されていたと思う
 2. ある程度されていたと思う
 3. わからない
 4. あまりされていなかったと思う
 5. 全然されていなかったと思う
- G. 部のきまりやルールは厳しかったですか
1. かなり厳しかった
 2. 多少厳しかった
 3. 普通だった
 4. あまり厳しくなかった
 5. 全然厳しくなかった
- H. 部のきまりやルールは守られていましたか
1. 十分守られていた
 2. ある程度守られていた
 3. あまり守られていなかった
 4. 全然守られていなかった
- I. 指導者の部員に対する態度はどうでしたか
1. かなり厳しかった
 2. 多少厳しかった
 3. 普通だった
 4. あまり厳しくなかった
 5. 全然厳しくなかった
- J. 練習などの環境条件はどうでしたか
1. かなり恵まれていた
 2. 多少恵まれていた
 3. 恵まれていなかった
8. あなたの生活について伺います
- 高校 (1. 自宅生活 2. 下宿生活 3. 寮・宿舎生活 4. 合宿所生活 5. その他)
- 大学 (1. 自宅生活 2. 下宿生活 3. 寮・宿舎生活 4. 合宿所生活 5. その他)

9. 陸上競技部における約束ことやきまり・ルールについて伺います。
 高校 (1. 厳しかった 2. 多少厳しかった 3. 普通だと思う 4. 厳しくなかった)
 大学 (1. 厳しかった 2. 多少厳しかった 3. 普通だと思う 4. 厳しくなかった)
10. 陸上競技部における上下関係について伺います。
 高校 (1. 厳しかった 2. 多少厳しかった 3. 普通だと思う 4. 厳しくなかった)
 大学 (1. 厳しかった 2. 多少厳しかった 3. 普通だと思う 4. 厳しくなかった)
11. 同じ陸上競技部のなかでのライバル意識について伺います。
 高校 (1. かなりあった 2. 多少あった 3. ほとんどなかった)
 大学 (1. かなりあった 2. 多少あった 3. ほとんどなかった)
12. 陸上競技において、あなたに対する指導者の影響はどの程度とお考えですか。
 高校 (1. かなり大きい 2. 大きいと思う 3. あまりない 4. ほとんどない)
 大学 (1. かなり大きい 2. 大きいと思う 3. あまりない 4. ほとんどない)
13. あなたの日常生活や行動内容をお聞きします。より具体的に記入してください。

	A.M.	P.M.			
	1.2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12	1.2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12	睡眠時間	練習時間	授業勉強
Mon.			()	()	()
Tue.			()	()	()
Wed.			()	()	()
Thu.			()	()	()
Fri.			()	()	()
Sat.			()	()	()
Sat.			()	()	()
Sun.			()	()	()